
歌声

地球の星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌声

【Nコード】

N6567B

【作者名】

地球の星

【あらすじ】

ワタルが幻界ヴィジョンから現世に帰ってからの、ミーナ、キ・キーマ達の物語です。サーカス公演をひかえた時期にミーナが事故にあってしまい、空中ブランコが出来ない状態に。果たして彼らはその危機を乗り越えられるのだろうか。

ワタルが戻らず帰らずの洞窟で怪物を退治して、2つ目の宝玉を手に入れて、数日後のことだった。

「ブボ団長、パック、それにみんな。私が突然旅に出たいと言いつ出してしまつて、本当にごめんなさい。」

ミーナは泣きそうなくらいに申し訳なさそうな顔を浮かべながら、みんなの前で頭を下げた。

急な決意に、誰もが動揺を隠せずにいた。

彼女の後ろでは、ワタル、キ・キーマとジョゾがいた。ジョゾはすっかりワタルになつており、彼から離れようとしなかった。

「ミーナ、そんなにお父さんに会いたいの？」

パックが言った。

「うん…。あきらめたくないの。それに、この人は幻界を旅するつて言っているから…。この人についていけば、サーカス団よりも早く色々な所にいけるでしょ？だから…。」

また沈黙が続いた。

「分かった。行きなさい。君の決意は誰にも変えられますまい。」
考えた末にブボ団長は腕組みをしながら言った。

「ありがとうございます。この恩は絶対に忘れないわ。」

ミーナはお辞儀をすると、サーカス団の仲間達に握手をしてまわつた。

「ミーナ、元気でね。悪い奴見つけたら、いつでもおいらを呼んでね。やつつけてやるから。」

パックが握手をしながら言った。

「ありがと。その気持ちをもらつておくわ。怪我には気をつけてね。」

握手をするミーナの目には涙があふれていた。

あれからしばらくの間、サーカス公演では空中ブランコは行われずにいた。

観客にとっては寂しい限りだったが、その分は他のメンバーで埋め合わせていた。中でもパックは誰よりも頑張っていた。彼は皿回しなどの芸を新たに覚え、彼女の穴を埋めようと奮闘していた。

そんな中、ワタルと別れたミーナがキ・キーマ、ジョゾと共に、再びスペクタクルマシン団に戻ってきた。

悲しみを乗り越え、再び持ち前の明るさを取り戻したキ・キーマとは対照的に、ミーナはまだワタルが現世^{うつしよ}に帰ってしまった悲しみが癒えずにいた。

彼女は会いたい気持ちを抑えきれなくなることもあったが、それを何とか抑えながら、また空中ブランコの練習に励んでいた。練習が終わると必ずジョゾの所に行き、頭をなでたり、やさしく抱きしめたりした。

次のサーカスの公演が2週間後に迫ったある日のことだった。

「それでは君にこれを渡そう。なるべく目立つ所や、人通りの多い所に貼っていつてくれ。よろしく頼む。」

団長はユナ婆とキ・キーマにサーカス公演の告知ポスターをたくさん渡した。

「あいよ、まかせなさい。」

「おれもサーカス見に行くぜ。宣伝頑張ってくるから、そっちも頑張れよ。」

「ありがとう。キ・キーマ、ユナ婆さん。私からもよろしくお願ひします。」

ミーナが2人に向かってお辞儀をすると、パックがたくさんのお宝を持って現れた。

「宣伝に行く前に、おいらの芸を見てくれよ。」

そう言つと、ワタルがいつかサーカスを見た時と同様に、お手玉を始めた。

ミーナは何度も見ているので普通の表情をしていたが、キ・キーマとユナ婆は驚いていた。

やがて、パックはお手玉を終えて、ボールを受け取った。

「すげーなあ、お前。ただのガキじゃねえんだなあ。」

「おいら、ガキじゃねえ！背は小さくてもショートの1番手を担当している、立派なサーカス団の一員だ！」

パックは自分がかかわれたと思い、持っていたボールを足元に置くと、キ・キーマに詰め寄った。

「わりいわりい。でもいいもん見させてもらったよ。ほら、これは見物料だ。」

キ・キーマは財布からお小遣い程度のお金を出すと、パックに渡した。彼はワタルに出会う前に泥棒2人組によって財布を盗られた経験があった。それ以来、財布は肌身離さずにかけていた。

「わーい！おじちゃん、ありがとう。」

パックは喜びながら「おじちゃん」にアクセントをつけて言った。「おれは『おじちゃん』と呼ばれる程、年は取ってねえぞ！」

彼に皮肉を言われたように感じたキ・キーマが言い返した。

2人はしばらくにらめっこするようにお互いを見つめていたが、やがて、2人とも笑い出した。それにつられてミーナも笑い出した。

「あなた達、何だかいコンビね。」

団長とユナ婆もつられて笑っていた。

「そ、そうかあ？」

キ・キーマが照れながら言った。

「でも、ミーナの笑っている顔が見られて良かった。ここ最近、寂しそうな表情多かったから。」

パックに言われてミーナははっとした。

「言われてみればそうね…。最近あまり笑っていなかったわね。」

「お前が笑うとおれも嬉しいよ。その笑顔を忘れるなよ。」

キ・キーマはそう言つと、ユナ婆が続いた。

「それじゃ、そろそろ宣伝に行ってくるから、お前さん達も怪我に

は気をつけて。」

「それでは、宣伝頼みましたよ。」

団長が言った。

「あいよ。」

「それじゃあな、ミーナ、バック。」

キ・キーマはわざとバックの名前を間違えて言った。

「おいらはバックだ！間違えんなよ、キ・キーマ！」

バックは皮肉っぽく笑いながら、最初のキをわざと半音上げずに言った。

それを聞いてミーナはまた笑い出した。まるで漫才のような2人のやり取りに、笑いが止まらずにいた。

それから数時間後のことだった。その出来事が起こるまでは、普段となんら変わらない日常だった。

「ミーナ！大丈夫か？しっかりしろ！」

団長やバックが彼女の所に駆けつけてきた。

ミーナは空中ブランコの練習をしている時に、手を滑らせてブランコから落ちてしまった。

幸い高さはそれほどでもなかったが、落ちた時の受け身に失敗し、右腕が自分の胴体の下敷きになってしまった。

周りは騒然となり、サーカスの練習場では悲鳴に似た声が飛び交った。

左手で右手を押さえながら苦痛の表情を浮かべてうずくまるミーナを、誰もが心配そうに見つめていた。

「ミーナ、ミーナ！しっかりしてよ！」

バックがすぐそばで見つめている中で、彼女は間もなく気を失ってしまった。

「とにかく、治療班を呼べ！急げ！」

団長が指示を出した。練習は中止となった。

ミーナは気を失ったまま担架に乗せられて医務室に運ばれ、治療

を受けた後、ベッドの中で横たわっていた。

彼女は眠りながらいつの間にか幻界でワタルのことを思い出していた。

…ワタル…。あなたは今どうしているの？現世で元気に過うつしよぎしているのかな…。

お父さんがいなくても、頑張つて生きているのかな…？お父さんのこと、恨んでいないかな…？

お友達に囲まれながら、明るく過うつしよぎしているのかな…？

…ワタル…。あの時はごめんね…。あの時、泥棒2人がジョゾを連れ去ろうとした時に、あなたはそれを止めようとしていたよね？

あなたには何の罪もないのに…、ブブホ団長が来た時にたまたまそこにいただけなのに…。私が嘘の証言をして、罪をなすりつけてしまったせいで、牢屋に入れられてしまった…。

私、あれから会わせる顔がなかった。何て謝ればいいのか分からなかった。

でも、私が戻らず帰らずの洞窟で泥棒2人組に取り押さえられそうになった時、あなたは言つてたよね？

「その子を離せ！」って…。

私、その時思つたの。(どうして？どうしてそんな言葉を私にかけしてくれるの？あなたを犯人にしまったのは私なのに。…)って…。

ワタルはあの時、まだ共犯の疑いをかけられていて、それを晴らすために危険を犯してあそこに乗り込んできたんでしょ？

共犯者ならあなたの目の前にいたわ。他でもない、私よ。本来なら私がワタルに捕まえられて、牢屋に入れられるべきだった。でもあなたは優しい顔をして私のことを許してくれた。そして、あなたの旅に私も一緒に連れていってくれた。

私、すごく嬉しかった。ワタルと会えて本当に良かった。ワタル、あなたのことは絶対忘れないわ。あなたと過ごした日々は私にとつ

て一生の宝物だし、あんなに一人の人を好きになったこと、今までなかった。

そして、何より自分の願いを犠牲にしてまで幻界を救ってくれた。だけど、あなたは現世に帰っていつてしまった。

あの時、「元気でね。」って私は言っただけ、本当はそんなこと言いたくなかった。ずっと一緒にいたかった。

あれから1日としてあなたのことを考えなかった日はないよ。

ワタル、あなたも私に会いたいつて言ってくれるかな？今も私のことを想っていてくれるのかな？

現世に帰ってしまったら、やがて幻界の記憶は無くなってしまう。ここで過ごした日々もやがて思い出せなくなってしまうってラウ導師に聞いたことがあるけれど、私は決して忘れないから。大人になっても、あなたのこと忘れないから…。

会いたい…。あともう一度でいいから会いたい…。会って確かめたい…。あなたが幸せかどうか…。私を覚えていてくれるかどうか…。

ワタル…、ワタル…。会いたいよ、ワタル…。

あれからどれくらい時間が経過したのだろう。ミーナはゆっくりと目を覚ました。

(ここは…？)

ミーナはゆっくりと起き上がろうとした。しかし、すぐに右腕に大きな痛みが走った。

「う、うつつ…。」

結局起き上がることが出来ずに再びベッドに横になった。

ミーナは左手で、体の上にかけられていた掛け布団をどけた。右腕には添え木が当てられ、その上には包帯が痛々しいまでにぐるぐる巻かれていた。

他にも両膝にも包帯が巻かれていた。足はあまりたいしたことはなさそう、何とか立つことは出来そうだった。

その時、どけたはずの掛け布団が動いた。

（えっ？何？）と思っていると、

「あれ？おいら、眠っていたの？」

と言う声がした。

「パツク？そこにいたの？」

彼は眠い目をこすると、やがてはつきりと目を覚ました。

「ミーナ、気がついた？丸１日眠っていたけれど…。」

「うん…。パツク、ごめんなさい…。迷惑をかけてしまつて…。」

「気にすることないよ。骨折はしているけれど、全治１ヶ月で済んだし。それよりさ…。」

「何？」

「寝言で何回も『ワタル』つて言っていたよ。」

それを聞いた途端、ミーナは真つ赤になった。

「あ、あれは…、その…。」

「確か、ワタルつて、現世から来た男の子で、ミーナとキ・キーマ、そしてジョゾと一緒に旅をしてきた人だよね？」

「そ、そうだけど…。」

「今でもワタルのことが好きなの？」

ミーナの顔がさらに真つ赤になった。

「う、うん…。忘れたことなんてないわ。ワタルのこと考えなかった日はないし、ワタルの幸せを願わなかった日はないわ。」

「ふーん、大切な人だったんだね。おいら、今ではあんなこと言つたのを後悔しているんだ。ミーナから真実を聞いた時、耳を疑つたよ。そんな…つて。」

それは、ワタルが怪物をやっつけて、ミーナ、キ・キーマ、ジョゾと一緒にサーカス団のみんなの前に戻ってきた時のことだった。

「ミーナ無事で何よりだった。しかし、その子は一体何だね？その子はサーカス公演の直後にジョゾを盗もうとしていた子じゃないのかね？」

団長のその言葉を聞いて、ミーナは固まってしまった。しばらく言葉に困ってしまった後、やっと言葉を見つけ出した。

「…ごめんなさい。この人は無実なんです。むしろ、ジョゾが盗賊2人に連れ去られそうになったのを止めようとしていたんです。そしてブボ団長が来た時、盗賊が逃げ出して、私と団長とこの人だけになってしまったんです。そして、私が彼に罪をなすりつけたの…。」

「じゃあ、ミーナはその時どうしてそんなところにいたの？」

パックが聞くと、ミーナは泣きそうな表情になってうつむいてしまった。

「私はその盗賊に協力していたんです…。お父さんに会わせてくれるという彼らの言葉を信じて…。でも、私は自分が捕まりたくなかったゆえに、嘘の証言をしたの。結果、盗賊の共犯者であった私が助かって、たまたまあそこに居合わせただけのこの人が盗人としてつかまってしまったの。本当にごめんなさい。ごめんなさい。」

その言葉に団長やパック達は返す言葉が見つからなかった。しばらく沈黙が続いた後、やっとワタルが言った。

「いいんだよ。僕は恨んでない。お父さんに会いたくて、仕方なくあいつらの言うことを聞いてたんでしょ？君も辛かったんだよね？」

「うん…。」

「たとえば、それまでどんなことがあっても、犯人を捕まえることが出来たんだからそれでいいよ。僕は共犯の疑いが晴れたし、これで安心して残り3つの宝玉を探しに行けるよ。」

「うん…。そう言ってくれてありがとう…。」

「パック、本当にあの時はごめんね。」

「いいんだ。あの時は驚いたけれど、でも、辛いことを思い切って話してくれてありがとう。」

ミーナはベッドに横になったまま、パックをじっと見つめていた。その時だった。外で「ミーナはここにいるのか？」と言う声がした。

そして大きな足音が響き渡った。まだ姿は見せていないが、それが誰なのかは彼女にはすぐに分かった。やがて、一人の大男が部屋に入り込んできた。

「ミーナ、いるのか？怪我をしたって本当か？痛くないか？立ち上がれるか？治るまでどれくらいかかるんだ？」

「キ・キーマ、そんなにあわてなくてもいいわ。右手を骨折しているけれど、全治1ヶ月で済んだから。」

「何だ、全治1ヶ月か…。良かった…。って、ええっ？1ヶ月？？」

キ・キーマはいかにも彼らしい言い方で答えた。

「それじゃ、今度のサーカス公演に間に合わねえじゃねえか！どーすんだよ。もうチラシ配布しちまったんだぞ！それもミーナが空中ブランコに乗っている絵が中央に載っている…。」

「やめてよ！そんなこと言うの！それくらい分かっているよ！」

顔が隠れるくらいにうつむいてしまったミーナをかばうようにして、パックが言った。

「花形である空中ブランコが無くなってしまったら、お客さんだってがっかりするだろうし、キャンセルしてしまう人達だっているかもしれないけれど、起きたのはもう仕方ないじゃないか！今、団長達は彼女が怪我したことをこれからどのように伝えて、お客さん達に分かってもらうか考えているんだ！そしてミーナの分を自分達で何とか埋めようと必死なんだ！」

キ・キーマとパックの大声を聞いてサーカス団の仲間達が入り込んできた。

「一体何だね？大声で騒ぐのはやめたまえ。」

団長の一言がきっかけて辺りは異様な静けさに包まれた。

みんながしばらく何を言えいいのか迷っていると、キ・キーマがたどたどしい口調で言い出した。

「そ、そう言えばさ、ワタルと旅していた頃、おれ…ミーナの歌声を聞いたことがあるんだ。えっと…、と、とてもきれいな声だったよ。」

「だったら何だよ？」

パックが皮肉を言うような口調で言い返した。

「つ、つまりさ、空中ブランコの代わりに歌を披露したらって…思ったんだ。サーカスじゃないけどさ…。ミーナの歌声ならきつと観客にうけると思ってた。」

キ・キーマは頭に冷や汗をかきながら言った。

また異様な静けさが続いた。

（やばいこと言っちゃったかなあ…。）

と、思っていると、ずつとうつむいたままだったミーナが顔を上げた。

「そうね。それ、いけるかもしれないわ。私、やってみる。」

さつきまでの落ち込んでいた表情はそこにはなかった。

「えっ？歌うの？」

「確かにミーナは歌が上手だけど…。」

「あと2週間だよ。出来るの？」

周りからはサーカス団のメンバー達の驚きと戸惑いの声が上がった。本当に出来るのだろうか。やるにしても、時間がない。果たして空中ブランコの代わりを立派に果たせるのだろうか。そのような声が上がリ続けた。

「私、それでもやってみる。出来ない理由なんて考えたくない。そんなのは時間の無駄よ。それよりも、どうしたら私の歌声でお客さんを満足させられるかを考えたい。ありがとう、キ・キーマ。」

「い、いやあ…。それほどじゃあ…。でも、笑ってくれて嬉しいよ。」

ミーナの目には希望の灯^ひが灯っていた。

次の日には、ミーナが病室のベッドで、ショーの本番で歌うための歌詞を考えては試しに歌い、懸命に練習をしていた。

その作業にはパックも加わっていた。彼はミーナ一人だけでは不安と言っことで、自分の出し物の練習もしながら、合間を縫って2人

で歌詞を考えては、一緒に歌を歌った。今ミーナは字が書けないため、彼女が歌詞を思いつくと、パツクがそれを紙に書きとめていた。キ・キーマは既に配布したサーカスの告知ポスターに新たに張り紙をしていった。そこには、「諸事情により、大トリでは、空中ブランコの代わりに別の出し物を披露します。お楽しみに。」と、彼の字で書かれていた。

キ・キーマは本来なら休日だったのだが、それを返上してこのような作業にあたっていた。

（おれの一言でミーナに役目を与えることが出来たけれど、本当にうまくいくのかなあ…。もし失敗したら、おれのせいでみんなに迷惑をかけることになるし…。頼むからうまく役目を果たしてくれ。頼む！）

作業は夕方まで続いた。やっとの思いで作業が終了すると、キ・キーマは自分のダルババ車のところまでやってきて、夕飯のための食料を取り出した。その時、ワタルが左腕にはめていたハイランダーの腕輪が出てきた。久しく見ていなかったため、彼は懐かしい気持ちになった。

（ワタル、おれの幸運様よ…。どこか遠くからでもいいから、ミーナを見守ってくれ。そして、彼女の出し物をどうか成功へと導いてくれ。）

キ・キーマは彼と過ごした日々を思い出した。しばらくは何もしないまま、腕輪をじっと見つめていた。

そして、いよいよ本番の日がやってきた。

ミーナの腕はまだ治っておらず、事前にキ・キーマが別の都市から買ってきておいた、痛み止めの薬を飲んでいた。本来ならば手はまだ三角巾で吊る必要があった。それでも彼女は空中ブランコをした時の衣装に着替えた。

本番開始直前までミーナは歌の練習にはげみ続けた。その時、パツクはオーブニングを飾る、自身のお手玉と皿回しの準備のため、そ

ここにはいなかった。

観客席は既に満席だった。怪我のせいでキャンセルが相次がないかメンバーは心配していたが、結果的にそれは杞憂だった。

メンバーはひとまずほっとしたが、次の瞬間にはそれが新たなプレッシャーとなつて襲い掛かった。中でもミーナは自分の歌声で観客を満足させることが出来るか不安で仕方なかった。

観客席にはキ・キーマとすっかり怪我の治ったカツツもいた。ただ、彼女は少し不満げな顔をしていた。

「このすつとこどつこい！あんたがサーカスに招待するつて言うから来てみたら、最後列じゃないか！」

「すみません。最前列とつたはずだったんだけど、おれの身長が高いせいで後ろの人の邪魔になるからという理由でこんなことになつて……」

「まあ、あんたのおかげであたしはただで見られるからいいけど、それにしても、代わりの出し物つてのが楽しみなね。」

「おれも楽しみだよ。何しろミーナにそれを勧めたの、おれだからうまくいくといいなつて思っているんだ。」

「ふーん、それは楽しみなね。うまくいくといいけど、失敗したらどうすんだい？」

「考えてねえよ！余計な心配をさせんでくれ。」

カツツはキ・キーマに何度も突っ込みを入れていた。

そして、いよいよ本番の時がやってきた。

「ご来場の皆様、ようこそ。」

団長が以前と変わらぬ口調で観客に言った。それに続いてパックが現れ、あの時と同じようにお手玉をしてサーカスのオープニングを華やかに飾った。お手玉が終わると、今度は初めて観客の前で皿回しを披露した。

サーカスはその時と同じように順調に進んだ。出し物が成功するたびに、観客からは盛大な拍手が沸き起こった。最後列で見えていた

キ・キーマをカツも拍手をしていた。

オープニングでの役目を終えたパックは早速ミーナと合流し、出番がくるまでのわずかな時間も使って、懸命に歌の打ち合わせをしていた。

そして、いよいよ出番がやってきた。

「本来なら今から我がサーカス団の花形、ミーナによる空中ブランコショーですが、今回はそれに代わって、ミーナとパックによる、歌のショーをお見せします！」

ブブホ団長が自信满满々に叫んだ。それまで前例のないことに観客はどよめいた。

「ええ〜!？」

「ブランコないの！」

「これ目当てだったのに！」

周りから声が飛んだ。その声は、まだ表に姿を見せていないミーナとパックにも届いた。その声に、ミーナは途端に自信を失ったような状態になった。

(まずいな、これは。何とかしないと。)

姿こそ見えないが、キ・キーマは彼女の気持ちを察していた。そう考えると、とっさに

「いけ、ミーナ！素敵な歌声を聞かせてやれ〜！」

と、大きな声で叫んだ。カツも含めて、周りの人達はびっくりした。

“何だよ、いきなり！”

カツは小声でささやくと、キ・キーマの足をつねった。

「うぎっ！」

キ・キーマは顔を引きつらせた。

観客からの異様な視線にさらされ、キ・キーマとカツは気まずい雰囲気にもまれた。

“あんたが出しゃばるから、変な注目浴びてるじゃないか！どーすんだよ！”

“悪い。ミーナに届けばと思って…”

そんな時、ミーナはパックと共に登場し、ステージの中央で並んで止まった。ミーナはお客を見るのが怖くなったが、ちょうど視線の先には立ち上がって応援しているキ・キーマがいた。よく見るとカッツもいた。

「空中ブランコの分を、歌で取り返してやれ〜!!」

その叫び声はミーナにも届いていた。

（キ・キーマ、応援しているのね。分かった。私、頑張るから。怪我で空中ブランコが出来なくなった分まで頑張るから。）

彼女は迷いを吹っ切ると、パックと共に歌いだした。

今も覚えてるよ

君と過ごした日々

辛い時でも忘れなかった

あの日の仲間のことを

苦勞した時も

糧に変わったよ

迷いながら賭けた夢も

恋だと知ったぬくもりも

どんなに祈っても

かなえられなかった

時間ときの流れを止めて

ずっと一緒にいることは

それでもいいよ

それでもいいよ

君と歩んだ日々はきつと

心の中に残るから

いつまでも

「どんなに」のパートではバックは手拍子を始め、コーラスを始めた。そして、ミーナが歌っていると、次第にサーカス団のみんながステージに集まり始め、整列していった。2番が始まると、みんなの手拍子が始まった。

不思議なことだよね

短い間でも

生まれた場所の異なる人と
一緒に旅が出来たこと

時代が過ぎてまた

君と会えたなら

あの日と同じ気持ちのままに
笑顔で語り合おうよ

どんなに祈っても

かなえられなかった

時間ときの流れを止めて
ずっと一緒にいることは

それでもいいよ

それでもいいよ

心を込めて祈る気持ちが
新たな道をくれたから

ありがとう

2番の途中では観客も参加して、みんなの手拍子をしていた。もちろん、キ・キーマとカツもだった。みんなミーナのきれいな歌声

に魅了されていた。

どんなに祈っても
かなえられなかった
時間の流れを止めて
ずっと一緒にいることは

それでもいいよ
それでもいいよ

冒険の日々 終わりはしない
心の中で続いている
いつまでも

歌が終わると、サーカス団のみんながミーナ、パックと一緒に一斉に手を振り始めた。観客からは盛大な拍手と歓声があがった。歌う前のどよめきは、どこにもなかった。

キ・キーマは最後列から階段を伝って、最前列まで来ると、

「ミーナ、最高〜！！」

と叫んだ。そして、両手を大きく振った。ミーナも彼に気づいていた。

（ありがとう、キ・キーマ。怪我をしてからのこの2週間、凄く不安だったけれど、あなたのあの発言のおかげで、こんなに立派な出し物を披露することが出来たわ。）

ミーナは苦しかったからこそ、それを乗り越えて得られる嬉しさに、感無量だった。怪我をした右手は下ろしたままだが、左手を大きく振り返すと、いつかワタルに向かって投げキッスをした時と同じことをした。キ・キーマはミーナの意外な行動に、思わずかぶっていた頭巾で目を覆った。

カッツは自分の席から拍手を送り続けていた。
観客からの拍手と歓声はいつまでも鳴り止まなかった。

ミーナは控え室に戻ると、痛みをこらえながら仮設用のベッドに横になった。パックは早速添え木を当てて、包帯を巻いた。そこにはジヨゾもいて、ミーナに寄り添っていた。

みんなが彼女を見つめていると、キ・キーマが入り込んできた。

「ミーナ、よく頑張ったな。大丈夫か？」

「キ・キーマ。どうしてここまで来れたの？ここは関係者以外立ち入り禁止のはずよ。」

「団長に特別に許可をもらったんだ。カツさんが色々説得してくれたおかげでさあ。カツさんはハイランダーの館に戻っていったけど。それよりさ、手は痛くないか？」

「痛かったわよ。正直、痛いのを我慢しながら歌っていたわ。ただね。」

「だけど、何？」

「ワタルが見守っていてくれたような気がしたの。ワタルが遠い現世から応援してくれたから、最後まで頑張れたと思うの。」

「ワタルがねえ。彼は今もお前の心の中に生き続けているんだなあ。」

「うん。歌い終わった後、ワタルの声が聞こえたような気がしたの。『あれから一度も、みんなとは会ってはいないけれど、僕はこの現世で元気に生きていくから。夢を大事にしながら、精一杯生きていくから。いつの日か、どこかでみんなと会うことが出来たら、心から語り合おうね。約束だよ。』って。不思議だった。はつきりと心の中でそう聞こえたの。」

「で、お前は何か返答したのかい？」

「うん。『ワタル。私も再び会える時を待っているよ。もし会えたら、心から語り合おうね。約束よ。』って。ワタルにも届いたかな？」

「きつと届いたはずだよ。きつといつかまた会えるさ。ミーナは今もワタルのこと、好きなのかい？」

キ・キーマが冷やかすように言うと、ミーナは思わず真っ赤になった。

「な、何言ってるのよ。」

周りにいたみんなからは大きな笑いが起きた。ジョゾも笑っていた。それにつられてミーナも笑い出すと、天井を見上げた。

「ワタル。私、いつかラウ導師様のところに行つて、現世に行けるようにお願いしてみるわ。そして、再び会うことが出来たら、あの歌の歌詞と同じように、笑顔で語り合おうね。あの歌はあなたのことを思いながら作ったの。それを、あなたの前で披露するからね。」

「そうか、おれも行つてみたいなあ。現世に。ラウ導師様は、ワタルと再会したいという理由で、あの扉を通してくれるかな？」

「私はそう信じているわ。強い気持ちがあれば、きっと行けるわよ。きつとね。」

「そうだな。」

ジョゾもミーナの傍らで、一緒にキ・キーマを見つめていた。彼もワタルと再会出来る時を、楽しみに待っているかのように。

（後書き）

2つ目のブレイブストーリー作品です。この作品は今年1月には出来上がっていましたが、発表する場がないままお蔵入りでした。ですからこのサイトで、発表できて嬉しかったです。

クライマックスで出てきた詞は、元々僕が10年以上前に書いたもので、タイトルは「Unforgettable」君と歩んだ日々」です。この作品のためにアレンジしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6567b/>

歌声

2010年10月12日02時12分発行